

目次

教育にとって農業とは何か 無着成恭……………8



現代の子育てにとって最も重要なことは、脳と手足のはたらきを統一して発達させることである。その方法のひとつとして、学校農園はきわめて有効な、作業及び学習を展開してくれるのである。

有情と無情の背中あわせ 邊見泰子……………16



私が幼い頃の《野原》とは、休耕地をも含めた畑をさしていました。畑とのふれあいが、都市の子供たちの自然——もしくは野生の生き物との交流事始めだったわけです。

農地と教育 長崎源之助……………36



子どもたちは、稲や野菜をつくることで、いろいろの観察をし、自然の神秘さを学びます。田んぼや畑が身近にあったら、子どもたちの成育にどんなに役立つかがわかります。

自然がもたらす豊かな子どもたちの心 深谷和子……………44



子どもが、自分の足で歩いて行ける範囲に自然があることが、いちばん望ましい。一日のうちたとえ数時間でも、自然と一体化して、自分をとり戻す。これがちいさい子どもたちにはぜひ必要だ。

都市農業と子どもたち 中川志郎……………52



その子が育つ環境こそ、最大の教師であるはずですが。豊かな土と緑を身近に持つことは、その意味でとても重要なことです。都会だからこそ、それがより多く必要なのです。

★たのしい草花あそび 邊見泰子……………22

★市民農園ガイド……………60

東京の花……………13

東京の野菜……………21

もし東京に大地震がおこったら……………41

東京農業の力強さ……………49

東京の畜産……………57

ミニ情報

自然を残して 保谷市立東小学校五年 樋渡恵美……………26

健康的で心ゆたかな町に 豊島区立豊成小学校六年 辻麻理……………28

僕の稲づくり 私立武蔵中学校二年 山中友之……………30

東京農業今昔——(1)……………14

東京農業今昔——(2)……………24

都市における市民菜園・みじかにある植物園……………34

自然の循環「土」……………42

もう一つの自然の循環「水」……………50

かけがえない緑……………58

みちくさ

子供たちの声

農業と自然

教育と自然

自然がもたらす

豊かな子どももの心

深谷和子



深谷和子（東京学芸大学助教授・児童心理学者）
子供達の「心と身体」の成長に関し悩みを聞いてあげる
手法などクリニックにおける研究は注目されている。
主著に、「遊びと勉強」「子どもと生きがい」などがあります。

かなり前のことだが、東京のある大きなデパートの屋上に、サルが一匹飼われているのを見た。
ちいさなベンチやアイスクリーム屋やヤキソバの屋台の付近だから、子どもたちへのサービスのつもりだったのかも知れない。事実、ちいさいオリの中に入れられたそのサルの周囲には何人も子どもたちが群がっていた。

近よってみるとそのサルはまだちいさな子ザルで、しかも一心に指シャブリをしているのだ。子ザルの指はまっ赤にはれ上っている。

人間の子どもたちが、指にタコを作りながら、チュウチュウと音をたてて指シャブリをする様子とそっくりで、私はびっくりした。

ちようどその頃私はちいさい子どもたちの指シャブリの研究をしていた。

人間の子どもの場合、①人工栄養で、②母親があまりかまってやらなくて、③自然の中での遊びが不足している（すなわち緊張解消の機会がない）という三つの条件を持っている場合が多かった。

この子ザルの場合も、まさにそうだったのだろう。ほとんど身うごきのできないちいさなオリの中に一日中とじこめられ、絶えず周囲の子どもたちの視線にさらされる生活は、ストレスそのものだったのだろう。その解消を、子ザルは指シャブリに求めたのだと思われる。

このエピソードは、人間の子どもたちにもそっくりそのまま、あてはめることができるかもしれない。

私たちが見逃しがちなことの一つに、人間と自然との関係がある。

私たちはこれまでともすると、人間と自然とを分けて考えることに慣れて来ている。

ところがよく考えてみると、人間はもともと自然の一部なのだ。自然という母親から、形の上では切り離されて、それぞれが独立して存在しているかに思えるだけで、ちいさい子どもや老人や、またストレスの多い状況に置かれて心がひずみかけているおとなた

ちの場合、どうしても母親のふところに戻る必要がでてくる。

とくに大都市という住環境は、考えてみるとよほどタフな神経の持ち主でなければ住めないはずの環境なのであろう。

本来なら、年齢は何歳から何歳まで（つまり青壮年段階）で、しかも一定のテストで合格した者だけ、つまりライセンスの所有者だけが、大都市に住むことを選択できるようにした方がいいのかもしれない。

しかし現実には、あらゆる年齢や気質や職業の人びとが都市に集まって来て、鉄とコンクリート造りの建物の中で暮している。

乳幼児は指しゃぶりを始め種々の神経性習癖とよばれる問題行動をひき起し、小学生は登校拒否、中学生は家庭内暴力や校内暴力をひき起す。そしておとなは——考えてみると、大都市に住む私たちは、大なり小なりどこかに病める心の部分を持って、暮しているのかもしれない。

とくにちいさい子どもたちは、毎日の生活が、自然の中で行われることが必要なのだ。昔の子どもたちがそうしたように、泥んこをし、雨上がりの水たまりの中に入り、草むらで虫をつかまえる。木に登り、ハダシで土や水の中に入る。作物が芽を出し、ふた葉を出し、一日一日と成長して行く様子を見たり、セミの幼虫がカラからぬけ出して、一人前のセミになる様子を目のあたりにする。

こうした環境が、できるだけ子どもの住んでいる環境（生活圏）の中に、または隣接してあることが



「東京農業の力強さ」

都市農業の力強さを端的に示しているものに農業従事日数があります。

これによると東京では年間150日以上も農業に従事している農業者が36.5%もいるのです。

秋田、新潟などの農業県と比べてこんなに高率なのは、狭い農地を有効に利用して、新鮮な野菜を都民にたくさん食べてもらおうと、努力しているからで、コマツナ、ツマミナなどは年に6回も収穫する方法をとっています。

〔農林水産省調〕



必要だ。おとなにエスコートされてごくたまにそれを見に行く、といったことではなくて、子どもが毎日でも、自分の足で（つまり自分の意志で）歩いて行ける範囲に自然があることが、いちばん望ましいことになる。

自然と無理に分けられた子どもが、一日のうちたとえ数時間でも、自然とふたたび一体化して、自分をとり戻す。

これがちいさい子どもたちにはぜひ必要だ。

そう考えて行くと、都市農業の意味が、人間の精神衛生や子育ての観点から、もう一度評価されなければならぬだろう。はた目には、そこにビルや道路や駐車場を作れば、すぐにもぼう大な利益を生み、かつわれわれの生活も便利な環境を作り出すのに、なぜ大都市の片隅で、土を耕し、種をまき、肥料をやって、野菜や花や穀物を作ってなければならぬのか、と不思議に思われるのではないだろうか。

しかし都市は、ほっておけば一層の経済性と生活の便利さを求めて、その人工性、反自然性をエスカレートさせて行く。

都市における鬼っ子のようなもの、またはある意味では「盲腸」（あっても役に立たないもの）のように見なされがちな「農地」が、われわれの心に、とくに幼い子どもたちや、体も心も弱くもろくなった老人たちに、どんなに大切な役割を果しているか。それを忘れてはならないだろう。

（ふかや かずこ）